

来賓挨拶

沖 修司（林野庁¹次長）

本日は森林総合研究所 REDD 研究開発センターの公開国際セミナー「参照レベルから読み解く REDD+の未来—2020 年以降の枠組みを見据えて—」がこのように国内外から多くの皆さまのご参加の下に開催されることを心よりお喜び申し上げます。世界各国からご参加される専門家の皆さまを歓迎申し上げるとともに、日本の皆さまには日頃から森林・林業行政の推進に当たり、格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年末にパリで開催された国連気候変動枠組条約の COP21 には私も参加し、将来の枠組みに関する森林分野の交渉に対応してきた。それぞれの国の立場の違いから意見が対立する場面もあったが、最終的にパリ協定を採択でき、森林を含む吸収源、貯蔵庫の保全強化に全ての国が取り組むべきことや、REDD+の取り組みの実施と支援を奨励することが明確に位置付けられた。

これを契機に、REDD+の実施に向けたさまざまな取り組みが一層活発化することを期待しているが、開発途上国の現場において REDD+を効果的かつ効率的に実施するには、まだ解決すべき課題が残されていることも事実であろう。

本日は国内外からお越しいただいた専門家の方々とともに、REDD+に関する 10 年にわたる議論を振り返りつつ、2020 年以降の REDD+の本格的な実施に向けて解決すべき課題をあらためて認識し、また、その解決の方向性を探る絶好の機会であると考えている。林野庁としても、本日のセミナーでの発表や議論を踏まえ、関係省庁等と連携しつつ、REDD+の実施に向けて技術の開発や人材の育成などに引き続き尽力していきたい。

最後に、本日のセミナーがご参加の皆さま一人一人にとって実り多きものになることを祈念し、私からの挨拶とさせていただきます。

¹ <http://www.rinya.maff.go.jp/>